

第1表 慶応4年～明治2年 武州荏原郡上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表題	収載年月	収録項目数	備考
1	慶応4年正月吉日	御用状留記	慶応4年正月～明治元年12月	238	慶応3年12月1日を含む
2	明治2年正月吉日	御用状留記	明治2年正月～同年12月	154	慶応4年26項、明治元年4項を含む

一 慶応四年～明治二年「御用留」の検討

(一) 「御用留」の存在状況

本章では、武州荏原郡上野毛村（現在、東京都世田谷区内）名主田中家文書の「御用留」のうち、慶応四年（一八六八、明治元年）から明治二年（一八六九）までの二年間の「御用状留記」二冊を検討対象としたものである。⁽¹⁾

小稿対象の上野毛村「御用留」二冊の表題年月、表題、収載年月、収録項目数等を一覧にしたものが第1表である。これによると、この期間の「御用留」の表題は「御用状留記」となり、収録項目数は慶応四年が三三八項目となり、一年分としては、これまでは最大であり、明治二年が一五四項目である。

本章の対象とした時期は、幕府の崩壊と維新政権の樹立期であり、まさに幕藩体制から維新体制への転換期の時期である。

この激動の中で、上野毛村を含む世田谷領二〇か村の領主でもあった彦根藩井伊家も徳川幕府を支えてきた譜代藩筆頭の立場から一転して反幕府の先鋒へと変身したのである。藩主井伊直憲は、藩の将来を家臣一万三千余人に問うと、佐幕論を唱えたものはわずかに四人であったといふ。⁽²⁾

慶応四年正月の鳥羽・伏見の戦いで、彦根藩は官軍側に立ち、幕府を攻撃した。これは、去就に迷っていた他の譜代諸藩の動向を決定させた。

彦根藩は戊辰の役でも官軍の先鋒を命ぜられ、下野国小山・宇都宮・日光、さらに北越・東奥州・会津若松城攻撃と激戦を遍歴した。上野毛村をはじめ世田谷領の農民も「郷夫」として戦陣に従軍していたことが、「御用留」の記述によって具体的に判明するのである。

この他にも新しい知見や動向が随所にみられる。

ここでは、幕府の崩壊過程と維新権力の関東への進出状況を「御用留」の記載の中から検討してみたい。

(二) 大政奉還後の幕藩体制

(1) 慶応四年の政治動向

慶応三年（一八六七）から同四年にかけて江戸とその周辺の関東農村の治安悪化は一層激しくなった。これは慶応三年一〇月ころより西郷隆盛の指示で伊牟田尚平・益満休之助が江戸および関東擾乱を計画、下総の郷士小島四郎（相楽総三）が中心となって浪士約五〇〇名を江戸の薩摩藩邸に集めて実行したためである。

まず、下野出流山（いずるさん）で分遣隊が拳兵、甲府城攻略と相模荻野山中陣屋の攻略にも向かったが、いずれも失敗した。これと平行して江戸市中で辻斬り・強盗・火付けを行なったが、これは天朝の「御用」と称したため、「御用盗」といわれた。この攪乱工作は慶応三年一〇月一四日の大政奉還後の政局に対する西郷ら武力討幕派の挑発行動であった。同年一二月二三日には、江戸城二の丸の炎上事件と市中取締りにあたっていた庄内藩屯所への発砲事

件がおこり、幕府はついに浪士討伐を決定し、同年二月二五早朝、江戸三田の薩摩藩邸等を焼き打ちした。伊牟田・小島らは品川沖碇泊中の同藩汽船翔鳳丸で西走した。この事件の報が大坂城に届くと幕軍・会津藩兵・桑名藩兵らが激昂して京都に進軍し、鳥羽・伏見の戦となった。また小島らは京都に着いて西郷の指示で赤報隊を結成し、東山道を進軍したが、慶応四年三月三日、「偽官軍」として信州諏訪で、小島ら主脳部は斬首され、赤報隊は潰滅した。同年四月一日には江戸城開城となり、討幕軍が入城し、將軍徳川慶喜は水戸へ退去したのであった。

このような時代背景のもとで、江戸と江戸周辺の関東農村の治安体制の強化が計られたのである。この時期の「御用留」には、その緊張した状況が刻々と記載されている。以下簡単にその動向をみることにしたい。

(2) 臨戦体制と兵糧方下役

慶応四年の「御用状留記」の正月一五日には兵糧方役所より「右ハ非常之節兵糧方焚出方下役兼而申付置候二付、万一の節ハ達次第即刻罷出候様可申触置もの也」として、第2表の一四名が「兵糧方焚出方下役」に任命されている(一項)。

一 一か村一四名で、触次役五名、名主役五名、年寄役三名、百姓一名となり、特に下北沢村からは四名も出ており注目される。幕末の臨戦体制の一環が有力農民を編成して組織されたことが判明する。

第2表 兵糧方焚出方下役一覧

村 名	役 職	名 前
下北沢村	触次	土 太 郎
同	百姓	喜左衛門
同	年寄	平 藏
同	年寄	重 藏
烏山村	名主	蕃 七
松原村	触次	沖右衛門
上飛田給村	名主	与兵衛
下祖師谷村	年寄	平右衛門
下沼部村	触次	兵左衛門
上野毛村	触次	七左衛門
覚東村	触次	権 七
喜多見村	名主	重右衛門
太子堂村	名主	忠左衛門
深沢村	名主	伴 藏

同年正月一九日には、下沼部村触次兵左衛門より上野毛・松原・下北沢の各村触次役に宛て、「非常之節ハ人足御雇立ニ相成候間、被仰渡置候義有之候間」「御雇立之義隣領江も談般いたし、歎願いたし候方可然哉ニ奉存候間、此段御打合申上候」として、非常の節の人足雇いの免除の出願の相談をしている(二項)。その全文を掲げると次の通りである。

改暦之御吉兆千里同風愛度申納候、然ハ此度兵糧方御役所々非常御賦人足可差出旨御沙汰御座候処、去ル文久三亥年六月中領々申合歎願いたし候処、御仕法替ニ而人足差出ニ不及、万一非常之節ハ人足御雇立ニ相成候間、被仰渡置候義有之候間、此度之義右被仰渡之通り御雇立之義隣領江も談般いたし、歎願いたし候方可然哉ニ奉存候間、此段御打合申上候、御銘々思召之義被仰聞度奉希候、御所存ニ寄早々隣領江打合同出府いたし候様取計申度候、右御打合申上度如此御座候、以上、

辰正月十九日

上野毛村

触次

七左衛門様

松原村

同

沖右衛門様

下北沢村

同

土太郎様

下沼部村

触次

兵左衛門

追而申上候、本文之一条御存寄之次第下ケ札ニ而被仰聞、留り御村方々村繼ヲ以被仰聞度奉希候、

三月四日には兵糧方役所より、兵糧方下役の招集がなされている(三三項)。

「右ハ非常之節兵糧下役兼而申付候通り、明後六日馬喰町御用屋敷江罷出候様可申触候、尤勤向之義ハ二夜三日勤之積其段も可申触もの也」とあり、薩長を中心にした討幕軍が三月一五日の江戸城総攻撃を目前にして、兵糧方下役が動員されたのであった。

それより半月ほど前の二月一五日には兵糧方下役の「御賦方人足」の整備も次のようになされた(三三項)。

各様方愈御精勤之段奉賀候、然ハ兼日御打合申上候御賦方人足之義ニ付、別紙之通書面差上候所□雇方之義も追々請負人御調方ニ相成、其余之分も成丈ケ御手広ニ御遣方ニ相成候様、其御筋江御申立被下候様被仰聞候間、此段御承引可被下候、就而ハ別紙入用筋ニ御座候間、御組々之内御焰硝藏御用村々御除御割合被成下候様奉希候、右申上度如此御座候、以上、

二月十五日

下沼部村

兵左衛門

孫 七 様 御兩人之内御当番の方

七左衛門様 二而御取計可被下候、

追而申上候、段々組々下役兼被仰付置候分、病死又ハ、難相勤もの有之候ハ、人撰代合之もの名前早々可差出旨被仰渡、尤先年中被仰渡之内咥人成共滅方ニは難相成旨ニ付、此段御承引可被下候、尤其御組之内交代之衆有之候ハ、人撰御取極名前書当方江御遣しニ、相成候ハ、序ニ差出可申候、若交代も無之候ハ、其段御申聞可被下候、しかし、江戸城総攻撃は中止となり、將軍徳川慶喜は水戸へ退去することにより、江戸開城がなされたので、戦争

に至らず、兵糧方下役らが實際にどの程度活躍したかは、把握されない。

(3) 関東取締出役と組合村体制の解体

慶応四年の「御用状留記」の正月一七日には、関東取締出役の中村政平・百瀬章蔵の連名で世田谷村寄場役人に対して、「街道筋・脇往来止宿の旅人名前・住所得と承札」「怪敷ものハ捕押置注進可致、川筋渡場ハ見張所差出置同様取計、海岸之場所ハ乗船・上陸とも取締方嚴重可取計候」と示達されている。

これを受けて、世田谷村組合では、「玉川筋渡船有之御村方江ハ見張手筈方御達申度候間、左様御承知可被下候」として玉川筋渡船に重要警備をしいた(三項)。

同年正月一八日には、大目付から各大名に布達された「御府内川筋通行船新規鑑札渡の触書」が記載されている(四項)。それによると「御府内川筋通行之船々之儀近來船数相増稼方猥ニ相成、不取締之趣相聞候ニ付、取締之ため是迄極印有之分ニ而も改而極印を打新規鑑札相渡、是迄之手形を引替候筈ニ付」として、鑑札を新規に渡すことによって通船の警備を強化したのである。

同年の正月一〇日には彦根藩世田谷領の代官所から、御府内出火の節は速に人足を差出すべき示達が出されている(五項)。これは前年一二月三日の江戸城二の丸炎上事件と関連したものと考えられる。すなわち、次のとおりである。

是迄御屋敷最寄出火之節ハ村々々駄附人足差出来候処、当今之不容易形勢此後御府内出火と見受候ハ、速ニ人足差出可申候、且又急変之節当方々人馬操出方触達次第不移時刻差出候様兼而手筈致置、都而御時節柄相并御不都合無之様可相心得候、

右相達候間、小前末々迄無洩本又之趣諷諭致置、且自然之節出人足之者心得違無之様是又精々可申聞置候、此段相達申候、以上、

辰正月十日

御代官所印

西郷隆盛ら討幕派の江戸とその周辺の擾乱戦術に業をにやした幕府は、前述したように、江戸三田の薩摩屋敷を焼打ちし、ついに鳥羽・伏見の戦端を開いた。

幕府は薩摩藩らの罪状を組合村を通して、村々に触れ、薩摩藩らに対する警戒を呼びかけた。それは次のとおりである（九項）。

旧臘以来松平修理太夫奸臣共窃ニ陰謀を企

朝廷を輕蔑いたし、殊ニ賊徒共を唱導し江戸・長崎・野州・相州所々江乱暴却盗および御国を乱り候所業難^(ママ)江御捨置罪状之次第、

一大事件衆儀と被仰出候所、去月九日突然非常御変革を口実ニ致、奉海幼主諸般候所置私論を主張之事、^(御力)

一主上御幼冲之折柄、先帝御依振被為在候撰政殿下ヲ廃止参内候事、

一私意を以宮堂上方を恣ニ懸涉せしむる事、^(場)

一九門其外御警衛と唱他藩之ものを煽動し、兵使を以宮闕ニ迫り候条、不憚朝廷大不敬之事、

一家来浮浪之徒を語合屋敷江屯集、江戸市中押込強盗いたし、酒井左衛門尉人数屯所江砲發乱妨其外野州・相州所々焼討、劫盜および候者証跡分明ニ有之候事、

右之通ニ候所、城州伏見ニおゐて奸賊共方理不尽ニ御人数江及発砲候ニ付、不得已御誅戮相成候間其旨相心得、先般申渡候義も有之候通り、此上ハ薩賊余党之もの潜伏いたし居候ハ、速ニ召捕討取可申もの也、

辰正月

右之通被仰出候条、組合限り村々高札場又ハ村役人宅前江張置、小前末々迄も不洩様申聞、薩賊と見受候分ハ勿論怪敷風林之もの村々之内ニ潜伏いたし居候ハ、時日を不移召捕手余候ハ、討殺可申候、万一心得違隠し置もの於有之ハ、嚴重御沙汰可相成候条可得其意候、此触書村名下令受印昼夜刻付を以順達、留村方吉田鄰助方江可被相返候、以上、

関東御取締出役

辰正月十一日

前書之通御触出候間、御村々御承知之上早々順達留方御返し可被下候、以上、

世田谷村組合

辰正月十八日

寄場
大小惣代 役 人印

同年二月一三日下野毛村名主栄次郎より、「去卯年十二月浪人一件二付、当村渡舟場見張人足御差出被成下候人足高御村々共御取調被成下、当村江御遣し可被下候」とあり、各村から渡船場警備に動員した人足調査が実施されている（一九項）。

また、二月晦日には、世田谷村組合寄場では、「去暮薩州浪人御召捕方道案内手当惣代願其外臨時入用共取調候処」として、「一合永百九拾七貫七百四拾五文五分」を組合村高四、八四九石二斗で割り、一〇〇石につき永四貫七七分余となっている（三九項）。

慶応四年五月二九日には世田谷村組合寄場では関東取締出役の吉川要之進・三浦乾之助の兩人より溝口村へ廻村し、最寄組合村々を呼出し、「御締筋嚴重被仰渡候義二付、御達向其外御相談申上度候間」として、五月晦に朝正五ツ時（午前八時）に寄場世田谷村幸右衛門方への出会の廻状が出されている（二六項）。徳川幕府は消滅しても下部の支

配機構は存続しているのである。

七月五日には、世田谷村寄場の総費用の明細が記載され、総額金三三兩一分と錢一四〇貫三文（兩替二三貫文）を
高四、八四九石二斗で割り、各村の負担をきめている。（一四一項）。

七月一〇日には、世田谷村役人より、「郷中御締式番村上俊五郎様御役所へ去ル七日、兵左衛門始稲毛領四ヶ村江
御用状到来直様出府、然ル所布田宿・中野村・中目黒村へも出府打合御座候」という順達が出され、その内容につい
ては「兵左衛門御用済帰村之上万端御談判可申上候」とあり、不明である（一四三項）。

八月二九日には、維新政府によつて任命された旧佐賀藩士で品川県知事となる古賀一平役所より「今般寄場組合村々
支配・地頭性名并村高共、一村限り取調、来月朔日迄ニ無相違可差出者也」という示達が出されている（一六四項）。

九月には、世田谷村寄場役人惣代名主久次郎・同見習鋭太郎の兩名から世田谷村組合の大惣代・小惣代が裁判所よ
り願のとおり決まった旨の廻達が出されている（一七二項）。

下野毛村

大惣代名主

栄次郎

等々力村

大惣代名主

兵左衛門

深沢村

小惣代名主

主女作

和泉村

小惣代名主

作平

弦巻村

小惣代名主

佐 太 郎

右ハ兼而御衆評取扱之通り今般御裁判所^ル願之通り被仰付候間、以来御承知御村々共御取扱可被成候、且又等々力村兵左衛門殿・下野毛村榮次郎右両人義ハ會計御役所御用取扱方ニ付、大惣代役被仰付候間、是又御承知村名下江御印形被成早々御順達、留^ル寄場世田谷村江御返し可被成候、以上、

世田谷村

寄場役人惣代

名主

辰九月

久 次 郎

同見習

鋭 太 郎

一〇月一八日には、取締のため組合村は存続していることと、とくに有力な組合村寄場の大惣代は會計局附属に任命されたことが民政裁判所から関八州村々の役人に次のように通達された（二〇三項）。

追而此触書元取締組合親村ニ而写取、組合限り刻印を以相廻し村々令受印、留^ル宿村繼を以會計局江可被相返候、

関内在々之義盜賊・博徒共等立廻り良民之害相成候もの共為召捕、旧幕之節^カ寄場村ト唱親村相定其余組合村々有之、大小惣代役をも申付有之所、今般 御一新ニ付而ハ差向関内取締役之もの等廻村無之所^カ、自然右組合村々之規則も相止消れ、大小惣代共も差免相成候様心得罷在候ものも有之候哉ニ相聞、以之外之義ニ而惣代役差免候義ニは決而無之殊ニ追々御取締御規則も相立候上ハ、其筋之もの廻村為致候義も可有之候へ共、当今之場合悪党共立廻り民心不穩成趣ニも相聞候間、今般東海道品川宿共他出口宿々近村之役人共之内、別紙名前之もの共會計局附属申

付右御用筋江為取扱、品ニ寄其村々江差遣し候義も可有之条、得其意大小惣代共談シ合御用便第一二相心得可罷在事、

右之通り関八州村々役人共江不洩様可触知もの也、

民政

辰十月十八日 裁判所御印

会計局附属

東海道品川宿

中山道板橋宿

山本 伴藏

豊田喜平次

飯田 庄十郎

武州葛飾軍隅田村

甲州道中内藤新宿

坂田三十郎

高松 金八

同州同郡久左衛門新田

日光道中千住宿

望月周三郎

田中左衛門

同州多摩郡田無村

石出 雄三郎

下田 範三

前書之通御達御座候間、村々御承知之上刻付を以御順達留方御返し可被成候、以上、

世田谷村

辰十月廿三日

役人印

明治二年の「御用状留記」の二月二十九日には、品川県より組合村の道案内二名ずつの選出が命ぜられている（三三項）。

三月七日には年番三か村より「賊党共取締方につき出張の廻状」が出され、「今般改而取締方嚴重被仰渡」たとある（三四項）。

三月には、「戸籍改正浮浪人取締の布告」が出され、「浮浪人之義二付而ハ昨年来毎々被仰出之旨も有之所、今以行届兼都下往々脱籍無産之輩有之趣二相聞実以不相濟事二候、就而ハ今般戸籍改正右等之徒御取締相成候二付、在東京之公卿諸候を初徴士太夫行政官支配附々、府下之社士民文武其外諸芸^{（藝）}二至迄無籍之もの差置候義一切不相成候事」とある（三八項）。

五月一七日には「郷中取締向の相談に集会方廻状」が瀬田村名主長崎長十郎から順達されている。それによると、「小子愚案仕候二斯形勢二御座候へハ仲々以片時も御同様二案堵^{（マツ）}相成兼候間、（中略）御料・私領之御持切之御締筋ハ見通しを付ケ置、退イテ素形之組合ヲ下々方之手心を以仕立一統締向相貫候様致度」として、組合村の再編による取締体制案を提示している（六五項）。

六月一日には、世田谷村武川久次郎・弦巻村鈴木一作から次のような村方の治安対策のための集会が順達されている（七一項）。

以廻状得御意候、愈各々様方御静勤被成御座奉賀候、然は当今悪党共所々立廻り已二兩三日前二も御領分御村々内江も大勢押入以之外^{（惣）}強動、只今之所二而ハ寸分取締之姿も無之故歟と奉愚察候、実二日夜片時も御同前二安慮致兼確と当惑罷在候、就而ハ領中締筋私共今日上町大場様江相伺候所、未タ御上様之御下知も無之段被仰聞、左候而ハ猶々打捨置候分ケニは参兼候間、不取敢御領分一統聡と手筈方議定致し、若右様之もの見懸ケ次第互二双方江通

達およひ人数操出し捕亡仕度と奉存候間、御繁多中恐入候へ共明二日正五ツ時揃世田ヶ谷村万幸方江御村々共御自身御出張御衆評奉願候、斯形勢之義二付一集会ニ而取極相附度存候間、呉々も御名代なく御自身御差操願上候、此状早々御願達留り村方御返し可被成候、以上、

世田谷村

巳六月朔日

武川久次郎印

弦巻村

鈴木一 作印

追而申上候、本文之義二付数々御相談を願上度義御さ候間、明二日正五ツ時揃無遅刻呉々も御自身御印形御持参御出張之程願上候、

さらに六月四日にも世田谷村役人から、村方の治安確保をどうすべきかという次のような順達が出されている（七三項）。

以廻文得御意候、然ハ引統所々強賊押入右等之御取締方追々御規則被仰出候義ニハ候得共、即今御支配御領主御手限之様御所置相成候得共、元来之組合ニ而悪もの手配方自然氣談を兼候場合も万一相生候而ハ取締向手弛出来、且ハ当組合ニハ限らず郷村御改革ニ付減村不成広組合度趣之由何方も同様詰りハ各御領主并御支配所筋々江伺候ならてハ難相成ハ勿論之義、今般篤と周旋御相談仕度候ニ付、来ル六日朝正五ツ時刻限無遅滞当村万や幸右衛門方江御自身御出席御尊評相成候様致度、是迄外御用先ニ而御面話迄ニ仕候御方々も御さ候へ共、此度ハ御自身御差操前書六日正刻御立会御衆儀可被下候様割廻文を以得貴意候、此状大急御願達留り御村方早々御返し可被下候、以上、

世田ヶ谷村

役

人印

已六月四日申下刻

追而為念御印形御所持可被下候、

六月一九日には世田谷村寄場大小惣代役人より、「兼而先達而中々御集評御座候御締組一条并組合江相懸り候諸入用割共仕度奉存候間」として、二一日朝正五ツ時（午前八時）世田谷上宿万屋幸右衛門方へ出張するやうにという召集状が廻達されている（七八項）。

七月一六日にも寄場役人から「御締筋之義得ト御談判申上度」として一七日朝五ツ半時（午前九時）に世田谷「万幸」方への出張方依頼状が出されている（九五項）。

八月八日には世田谷村名主久次郎より「御締向之義ニ付急速御相談申上度義候間」として九日正五ツ時へ「万幸」への出張依頼が廻達された（一〇九項）。

八月一日には等々力村兵左衛門他一名から、「賊党再狩の村々持場・人数割りの廻状」が次のやうに出されている（一二二項）。

急廻状を以得御意候、引続賊党押込先日御打合之通り再狩可致間、来ル十三日晝七ツ時揃左之人数兼而之場割ニ基ケ所々江進ミ、夫より左之組割丈之村々を巡邏致し、^(マ)自各婦村取引候様右之段御承知此状刻付を以御順達、留りる御返し可被成候、以上、

稻荷坂 拾四人 等々力村

明神山 拾貳人 同 村

「御用留」の性格と内容（七）（森）

のら田 拾壹人 下野毛村

下のけ 四人 上野毛村

吾妻表 拾七人 瀬田村

ノ五拾八人

是ハ野良田村揃 兼力藏
道吉ふん

前書之通り人数等御承知可被成候、以上、

巳八月十一日未中刻出ス

等々力村

兵左衛門印

下沼部村

兵左衛門印

さらに、この明治二年八月、世田谷村名主武川久次郎他二名の名主が彦根藩世田谷領村々惣代として、旧幕領を引継いだ品川県からの組合村編成について旧幕時代の藩領域を超えた組合村とすべきか、彦根藩世田谷領限りの組合とすべきかとの尋問につき後者を選択したい意向が郡治執役（旧世田谷領代官）に對し、次のように述べられている（一二三項）。

乍恐以書付御届奉申上候

御領分村々惣代左之名前之もの共奉申上候、

大政御改正以来在々御締向兼而御手限ニ被仰出も御座候處、右ニ付而ハ乍恐^{（廉）}簾々不都合之義も有之候間、其段先頃

中より書面御伺中、今般品川県御役所より被仰渡之趣意九ヶ村役人共より申聞候間、左に奉申上候、

一品川県御役所江当御屋敷様より御掛合之趣へ、元組合村取建候上^(旨)至然悪党共立廻り捕押もの有之候節、両御檢使可相成旨御問合御座候段右御役所より被仰渡候連、九ヶ村役人共より申聞候、

一右県御支配所村々役人共より申聞候へ、至然両御檢使に相成候節は余財入費にも有之候間、下方心得方可申立旨前書御役所より被仰渡候段申聞候、

一同県御支配所村々より申聞候へ、非常之折に両御檢使に相成候而も余財も相費候間、如何之存意に有之哉、其答方二寄支配役所江可申立答二付、其段問合候旨申聞ケ候、

前書之通り九ヶ村役人共より之申聞二付而も、元組合村取建御取締筋出情敵に相貫候而も、入費筋格別相嵩候而も実以今節柄必至疲瘦中如何にも当惑仕候、然上へ素来之御趣意御手限に相成候様致度奉存候間、無余義組合村立分度旨先方村々江相答申候、定而品川県御役所より御答も御さ候義と奉存候間、不取敢此段乍恐以書付御届奉申上候、以上、

明治二巳年八月

郡治執役

御中

世田谷村
名主

武川久次郎印

弦巻村
名主

鈴木 一作印

瀬田村
名主

長崎長十郎印

引きつづき、「御取締向規則議定書之事」の七か条が次のように定められた(一二三項)。

「御用留」の性格と内容(七)(森)

議定書

御取締向規則議定書之事

(大) □政御改正以來在々御取締向其支配々々手限り被仰 [] 今般 御当藩御支配所左之村々御締筋御仕 [] 渡候ニ付而ハ基礎確手^(力)と申合之条件左之通り、

□之支配所江対し役名を受居候ものハ勿論、小前末々たり共御締向之義諸事御用筋ニ付、不埒不法之事共無之様相慎可申事、

一支配分ケ御取締ニ相孕り候上ハ、第一居村々々を嚴敷心付其余村々聊無隔執いたし互ニ諸事心を附合ひ可申事、
一自然火急惡党共立廻り候節ハ合図を致し、遠近共時刻不移様得物を携變村江駈付捕亡尽力可致、尤捕押方ニ付互ニ騷論堅禁戒之事、

一村内小前之もの共江も平常遂探索を、若賊心有之者共ハたとへ小過たり共召捕、村役人は勿論惣代役之者^ヲ吟味致し後悔無之様、且又他之支配所江被召捕間敷様精々可心掛事、

一第一所役人^方は勿論惣代役捕亡手伝之もの^方常々如何敷ものを探索致御締方可為貫候事、

一惣代役之もの他向引合ハ勿論諸事出動向手当可差出事、且捕亡手伝之もの^老ヶ年給料^老人江米^老人扶持ツ、可差遣外、他向ハ勿論都而出動筋手当可差遣、尤当御支配所村々之内は不及申、自然他向御用筋役名を以

御威光ケ間敷掛ケ合、且依怙之取調を聊たり共為致間敷候事、

一諸事入費筋之義ハ村々役人立会高割を以無異儀出錢可致事、

メ七ヶ条

前書數ヶ条御取締規則今般村々立會議定致置候上ハ、聊違失無之小前末々迄も不洩様教戒可令^(ママ)候、依之村々役人

一同連印書如件、

明治二巳年八月

外拾九ヶ村印

上野毛村
名主

田中七左衛門印

〔得御意候、然ハ兼而御承知ニ相成居候御締向ニ付議定書〕銘々御調印可被成候、外壺通私外式ヶ村ニ而郡治方江同様御締筋元組合村一条ニ付差出候書面写共御廻し申上候間、御村々共即刻御順達自留御返脚可被成下候、以上、

瀬田村

名主

長崎長十郎印

巳八月十一日

追而申上候、先比中矢張御締向ニ付元組合之義 御屋敷様江御伺書写御廻し申上候処、未タ滞り居候哉、早々御返し可被下候、以上、

八月一三日には瀬田村名主長崎長十郎より盜難の被害調査の廻状が次のように出された(一二五項)。

以廻状得御意候、然ハ今十三日等々力村兵左衛門殿ニ面会候処被申聞候は、去ル七日村々山狩之義兼而支配役所江相届ヶ候処、就而ハ申合村一円是迄強忍之賊^(悪)ニ至迄、金器・衣類盜被取候もの之名前村々ヶ所取調差出可申旨右役所方被申付候間、依而ハ其御支配地御村々之内当七月以來方是迄強忍ニ不抱賊難ニ遭ひ候もの、村分ヶ名前私方取調之義御達申吳度被相頼候間、此段御達申上候、

右ハ御村々共都而盜難筋ヶ所々々名前且何月何日昼夜之差別迄御取調被下、下ヶ札を以御村名下江被仰聞度、大急此廻状御順達留方御返脚可被成候、以上、

巳八月十三日

七た村
名主
長崎長十郎印

八月二四日には郡治執役より、古脇差の捨品についての心当りの者の調方の達書（一一六項）、

八月一九日には、等々力村兵左衛門より「只今薩州浪人壺人雪ヶ谷村辺々当村寺料方江相便り足銭申受度、前村々
る貰候包金差出忒朱・壺朱位ひツ、請取、村継人足二而其御村方江候り候由」として人相書が添付されて、指名手配
されている（一一七項）。

八月二五日には瀬田村名主長十郎より、「先達而中元組合村一条二付御掛り郡治方江廉々御伺書忒通、其後藩県手
切二相成候二付、当御支配所村々議定規則本書共御廻し申上候」とあり、前述の一一三項について触れている（一一
九項）。

以上により、幕藩体制の崩壊とともに、治安取締機構が解体し、一種の空白状況が出現し、「悪党」の跳梁に対し、
村落防衛をどうするかということが緊急の課題となっていたことが判明するのである。

（4） 世田谷領代官の動向と大場家

幕藩体制の崩壊と維新権力の樹立という政治的大転換の中で、村落支配の先端に位置した代官にはどのような変化
がみられたのであろうか。ここでは、上野毛村を管轄していた彦根藩世田谷領代官を中心に「御用留」の記載からう
かがってみよう。

慶応四年の「御用状留記」の二月一九日には、御代官所から「広田常平義去ル十五日身分之義二付、御役儀御免閉
塞被仰付候趣申来り候間相達候」とある（二二項）。広田常平は井伊家々臣から任命された代官で佐野領・世田谷領

を担当していた。なぜ代官職を罷免されたのか、その理由は不明である。

二月二十八日には、同代官所から「繁岡与兵衛去廿三日佐野表々帰府致候間、其旨相心得可申候」という示達が出されている（二四項）。繁岡与兵衛は広田常平と同じ立場の代官であり、広田の罷免に関連して、佐野領から江戸屋敷に帰府したものと考えられる。

六月二十四日には、代官所より「横川虎蔵、右之もの此度御代官役被 仰付、当御領分住居ニ被仰付候間、其旨相心得可申候、尤住所之義ハ追而被 仰出候間其旨も相心得可申候」とあり、代官が大場家以外にも世田谷領分に住居することとなったことは注目される（一三七項）。

明治元年二月一七日には、代官役名が、「議行局郡治方九等執役」と改名され、世田谷郡治執役となった（二三二項）。

明治二年の「御用状留記」の四月一二日には郡治執役から「横川虎蔵儀一昨十日願之通り役儀御免被仰付候」という廻達が出されている（五三項）。

六月五日には世田谷村名主武川久次郎から「大場様御隠居御病氣之処、御養生不被為叶昨夜御逝去被遊候旨被仰出」との通知が出された（七四項）。この御隠居とは、代官大場弥十郎の後妻武津のことであり八五歳で卒去した⁽³⁾。

二月二日には、同じく世田谷村武川久次郎から「今日大場弘之介様御 札被遊候ニ付御披露被遊候由之趣被仰聞候間、明三日昼四ツ時（午前一〇時）揃午御苦勞御出張可被成候」との廻達が出された（一四三項）。大場弘之介は慶応四年三月六日に、伊佐と結婚していたが、世情騒乱の最中のため、披露をこの時まで延期していたのであろうか。

(三) 維新政府の樹立と領主・農民の動向

(1) 維新権力の進出過程

彦根藩世田谷領は徳川譜代大名井伊家領地として存在してきたが、維新変革の過程で井伊家は、新政府側に荷担し延命を図った。

この世田谷領村々が維新政権下にどのように編成されていたかを「御用留」の記載から検討してみよう。

一五代將軍徳川慶喜は、慶応三年（一八六七）一〇月一四日に大政奉還を申出たが、なお幕藩体制支配はそのまま存続した。このため薩長を中心とした討幕派は一日も早い幕府打倒を期して策謀した。

慶応四年二月八日、井伊直憲は王政復古について藩の行くべき方向を示す告諭を出し、朝廷の御主旨を奉体せよと命じ、広く農工商より人材登用の意図を公にした。⁽⁴⁾

慶応四年の「御用状留記」の二月一〇日には藩より布達された「公儀所設置衆人の公儀採上げにつき申出方触書」が記載されている（一八項）。

それによると、「皇国御制度之儀基本ハ全国之 公儀所ヲ以定むべきハ至当之義ニ付、政權を奉歸 朝廷諸藩 公儀を被為尽候様 奏聞致し候義ニ有之、然ニ是迄ハ家政向を熟考すれば士民之心ニ称はざる事少からず、実以恥入候、就而ハ此度 公儀所を設け広ク衆人之公儀を採上、下之情相通し候様致度候間、銘々見込之趣不憚忌諱申聞候様可致との 上意候」とあり、さらに「上意有之候ニ付而は 御目見以上以下次三男・厄介、且諸藩士井百姓・町人共ニ至迄、有無之輩ハ見込之次第書面を以公儀所江可被申立候、尤事柄ニ寄口上を以申候とも不苦事」として、「皇国御制度」の基本として「公儀所」を設置し、世論を基礎にした政治を執行することを宣言したものである。

二月一五日には、將軍徳川慶喜が上野の寛永寺に入り、謹慎した旨が次のように伝えられた(二一項)。

御目付江

上様東叡山江 入御御謹慎ニ付、万事相慎罷在候様可相達旨西藤左衛門殿御申聞ニ付相達候、(可脱力)被得其意候

二月十五日

さらに三月一日には、関東取締出役より一月二日付での高札場又は村役人宅前へ張置きを命じた触書は、將軍が「御恭順」となったので、撤去するよう触れている(二八項)。

さて、「官軍」という名称で討幕軍の記載が登場してくるのは、慶応四年三月九日の次の廻状である(四〇項)。御親征ニ付宿々官軍通行之節兵食并人馬繼立之義ニ付申渡義有之間、明十日朝五ツ時刻限無遅滞罷出可相届候、此廻状早々順達留り村々可相返候、以上

勅使御下向御用

品川宿出役

江川太郎左衛門手代

大井田源八朗印

辰三月九日

巳ノ上刻

三月一二日には、代官所より「水帳面等官軍より取上げの風聞につき村々取計方ほか達書」が次のように出された(四二項)。

今般 勅使御下向ニ付、村々水帳面并村絵図其外共官軍方々取上ケ候風聞有之候ニ付、右様之節ハ如何取計可申

「御用留」の性格と内容(七)(森)

哉之趣申出候間相伺候処、当御領分之儀ハ御他領と違ひ候間、取上ニ相成候義は有之間敷候へ共、若沙汰有之候節ハ領主江戸屋敷江差出置候間、取調可申上旨答置模様急速当方江可申出候、尤大切之書類ハ写拵置可申事、一品川宿江人馬差出候様被 仰付候ニ付而ハ、御屋敷御用人馬差支可申哉之趣申出候へ共、当方も大切之御用ニ有之間人馬見積残置、当方達次第可差出候、尤先方も大切之御用ニ候へハ、不都合無之様取計可申候、若嚴重之沙汰申越候ハ、領主江戸屋敷江差出置候趣相答、即刻模様当方江可申出候、

右之趣相達候間、得其意不都合無之様取計可申候、此狀即刻無滞順達留可返候、以上、

三月十三日

御代官所印

三月一六日には、品川宿御用先より瀬田村名主長崎長十郎等三名から、「今般勅使御下向御用ニ付、今十三日可能出旨御出役様方御沙汰ニ付、品川宿江出張仕御伺奉申上候処、私共惣代ニ而諸事御用相勤候様被仰付候間、一同御免奉願上候へ共何分御聞濟無之、無余義御受仕候間此段一寸御通達申上候」として、長十郎等三名が惣代となつて官軍の諸事御用を勤めることになつたことを廻達しているのである（四三項）。

こうして、三月一四日には、早速品川宿問屋・年寄・名主の連名で、三月一六日・一七日の両日に「親征御用御人数方御荷物急御用御通行」による人足一、三一〇人の動員のうち、世田谷領村々から六六人、そのうち三人が上野毛村からの人足として割り当てられた（四五項）。

同三月一四日には瀬田村長十郎等三人の惣代は甲州街道高井戸宿御用先より、世田谷領村々に対し、高井戸宿からの助郷差出については拒否することを示達している。これは、品川宿と高井戸宿の両宿への助郷は「相勤兼候趣只今懸合及中之義ニ付」とある（四六項）。

三月一五日には「御親征御用懸り下沼部村御用先江川太郎左衛門手代大井田源蔵」より「今般 御親征御用ニ付、

助郷惣代共人足触当候ハ、速ニ差出候様可被致候、尤品川宿方触当候ハ、差留置当村江差出し可申候」とあり、品川宿ではなく下沼部村へ人足を差出すように命じている（四七項）。

同一五日には「下沼部村御用先品川宿定助郷惣代毛利多喜蔵」他一名から、人足一三七人、この中には上野毛村の三人も含めて、明一六日・明後一七日として下沼部村名主方へ差出すよう命令された（四八項）。

一六日にも人足一三四人が一七日・一八日に下沼部村名主方へ差出すよう廻状が出されている（四九項）。

同一六日には品川宿御用先江川太郎左衛門手代大井田源八郎より「御親征御用ニ付先般中申付置候御用途金并粮米共、高百石ニ付金三両・白米三俵宛割合ヲ以、来ル十九日迄ニ品川宿江無相違差出可被申候」として、人足だけではなく、金・米の提供も要求された（五〇項）。

以後連日のように人足提供を要求されている記載が続いているが繁雑なので省略する。

三月二日には猪方村文吉から、「品川宿江相勤候人馬之義、下高井戸宿問屋弥惣右衛門殿右宿方江出張被致、是迄之通り高井戸宿江相勤候様取極候ニ付、若品川宿方相触候共御差出ニ不及」という触書が出されている（六一項）。

三月二三日には、品川宿御用先より長十郎・作兵衛・安太郎の三名から、「今般御親征御用人足品川宿并下沼部村方触当有之候共、決而御出し被成間敷両方共御免除に相成居候間、仮令何様申触候共急度御断可被成候」という廻状が出された（六四項）。

同二三日、下沼部村名主兵左衛門からも、「只今品川宿方触当方一ト先見合候様申越候ニ付、此段御承知引今晚方御差出しニ及不申候、右得御意度如此ニ御座候」という廻状が記載されている（六五項）。

三月二四日には瀬田村名主長崎長十郎と弦巻村名主鈴木安太郎の両名の連印で「今度御親征御用ニ付官軍尾州様瀬田・用賀・世田谷三ヶ村に御旅宿ニ相成候趣御沙汰ニ付、私共両人右賄方書役被仰付候間、只今罷越候所御延引之

御沙汰之旨、尤右二付種々御相談仕候義も有之」として集会の廻状を出している（六八項）。

三月二四日には、代官所より「御親征御用ニ付村々鉄砲所持之もの有之候ハ、此状着次第村役人差添上町江無相違持□可致候」とある（六九項）。

三月二九日には、下野毛村役人より「今般官軍御用として当村御番所御取立ニ相成候」として、下野毛村に官軍の御番所が設置されることとなり、「且又料理人内夫之分ハ当村ニ而相賄候間、左様御承知可被下候」という廻状が出されている（七一項）。

三月二六日には、代官所より「今般 御親征御用ニ付、明後廿八日夕七ツ時（午後四時）迄二刻限不遅様板橋宿江差出可申候」として、郷夫二〇人の動員（内一人は上野毛村より）が命ぜられた（七五項）。

四月三日には代官所から、「今度 官軍御用ニ付尾州候御人数宿陣有之、其上見張番所等有之」という通達がみられる（七六項）。

四月四日には、世田谷村役人から、上野毛村に対し、人足三人の差出し廻状が届いている。「明五日夕方方至翌六日夕方迄昼夜勤、御官軍方御用人足有之間、銘々弁当持参ニ而当御役場に御差出し可被成候」とある（七七項）。

同じ四月四日には、世田谷村役人から「今般 御官軍方此上大御人数御宿陣被 仰付候節ハ、高百石ニ付夜着蒲団凡五六人前程之見積を以御用意可被下候」として、宿泊の蒲団の提供も要求されている（八〇項）。

四月八日にも、上野毛村では「官軍方御用人足」として四人の差出しを命じられている（八一項）。

四月一一日には、下野毛村名主栄次郎から廻状があり、大場世田谷代官から、「板橋行郷夫之義代合六ヶ敷候趣被申聞候間」「今度一ト代丈ケ御聞濟ニ相成候」として、今回限り板橋宿への郷夫の差出しを命ぜられている（八三項）。

四月一五日には、世田谷村松本宗八より、「今般品川宿御兵糧方江川太郎左衛門様御手代中々、当月晦日迄高百石二付金三両・白米三俵ツ、上納可致旨、当村々夫々可相達旨被仰付」られたので、明一六日朝四ツ時（午前一〇時）に上宿松本屋幸藏方へ出会の廻状が出された（八六項）。同様のことが前述のように、慶応四年三月一五日にも同額の金・米の提供を要求されたのであった（五〇項）。

四月二〇日には世田谷領代官所から「板橋宿詰郷夫旅用手当金差問候趣同役方申聞候間、老人二付金三両宛此状着次第上町江無相違相納可申候」とあり、金子の上納を命ぜられている（九一項）。

閏四月二〇日には、年番三か村役人より「板橋行郷夫世話人之義ハ和泉村作平殿出張之处、当節至大差支出来候二付、依之村々御相談可申上之处、時節柄故御難渋ニも可有之哉と奉存、年番村打寄得ト談判仕大場様御伺之上世田谷村米藏殿相頼候間、右路金老人二付金四両ツ、来ル廿三日朝迄二大藏村六右衛門方迄御出金可被成候」との廻状が出された（一一〇項）。板橋宿への郷夫の差出しも続いていることが判明する。

四月一二日には、東海道先鋒総督府附会計方より世田谷村外二五か村役人宛で、「今般官軍兵食賄向二付、其村々并組合村々共高百石二付左之通、一白米三俵宛、但四斗入二而一金三両宛」「米金共当月十五日迄晦日迄二無相違差出候様」「追而從 朝廷御下ケ金二相成候二付、其節ハ相当之歩合を附御下ケ被遣候間、左様相心得可申候」とある（九七項）。

閏四月二二日には、諸主調所より、烏山村名主藩七・粕谷村名主篤次郎・上野毛村名主七左衛門の三名が「今般官軍御賄方仕下役被 仰付候義二付、明廿二日朝五ツ半時外桜田井伊掃部頭屋敷内御賄所江刻限無遅滞可罷出もの也」とあり、「尤着服之義ハ袴羽織帶刀いたし可罷出候」という武士のいでたちで出頭するよう命じている（一一一項）。

「官軍」側が有力名主等を「御賄方下役」に編成する一つの姿をみることができる。

(2) 領主井伊家の動向

徳川幕藩体制の中では譜代大名筆頭としてその中枢を占めていた井伊家は、この維新の大転換の中でどのような動向を示したのであろうか。本書所収の「御用留」の記載の中からうかがうこととしよう。

慶応四年「御用状留記」の二月三日には、世田谷代官所からの廻状で「昨十二月中彦根表江急発之節郷夫ニ罷出候もの共、手当金不足ニ相成候趣同表方申越候間、銘々金子持参今三日夜刻迄二上町江可罷出候、尤明朝御飛脚江為差登候義ニ付無相違可罷出候」とあり(一二項)、世田谷領村々から彦根表へ郷夫として出張している者がいたことがわかる。

一六項の廻状には、「去卯年十二月廿日出郷夫六人 彦根表行未夕帰国致不申、依之一同相談之上、六人分入用金六拾両と取極メ則割合高之通来ル十六日世田谷村名主方江持参可申事」とある。

二月晦日には、代官所から、領内村々から人足一〇人(内二人は上野毛村)を「彦根表江大砲御廻しニ相成候ニ付、包方御用明朝日晝六ツ半時不遅様御元方大鳥居彦右衛門殿御長屋江向無相違差出可申候」とあり、彦根表へ大砲輸送の梱包人足として動員されている(二七項)。

閏四月二日には、代官所から、桜田御賄方行の役馬四疋(内一疋は上野毛村)の差出しを命ぜられているが、その触書の中で「明後四日朝江戸表出立彦根表江罷登り」とあり、江戸屋敷から彦根への引越が開始されている(九九項)。閏四月一五日には代官所から、千駄谷屋敷内の畑耕作の希望者の調査の達書が次のように出されている(一〇七項)。以書付相達候、然ハ千駄ヶ谷御屋敷畑地多分有之、是迄御家中衆ニ而作居候処、此度彦根表住居ニ相成候ニ付、右御屋敷江罷越農作致度望之もの得ト取調、有無共否来ル十八日迄二上町江無相違可申出候、尤御長屋ハ拝借被 仰

付候、尚荒地等多分有之候ニ付、開發致度もの勝手次第其割合ニ而御年貢上納可致事ニ候、右相違候間其旨相心得村々御百姓次男・三男抔得ト取調査可申出候（以下略）

これによると、井伊家の下屋敷である千駄ヶ谷屋敷には広大な畑地があり、これまでは家臣が耕作してきたが、このたび江戸を引き払い彦根表に居を移すことになったので、千駄ヶ谷屋敷の畑地の耕作を希望するものがあれば申出よ。長屋は貸与し、荒地の開發は自由であり、開發に応じて年貢も上納することとあり、百姓の次男・三男に呼びかけている。

閏四月二四日には、代官所から「御中屋敷ニ而品々御払ニ相成候間、村々望之もの無之哉」との廻状が出された（一二三項）。彦根藩の中屋敷は赤坂喰違にあつた。

翌二五日には、代官所から「昨日相違候御中屋敷払物之義ハ、古御道具・みの笠類とも入札御払ニ相成、就而ハ明廿六日下見セ可申間、望之ものハ同日朝五ツ時迄九ツ時迄ニ御中屋裏御門前江相揃候様夫々可達候」とある（一一四項）。

五月三日には、同じく代官所より「新道具類御払ニ相成候ニ付、望之もの有之候ハ、明四日・明後五日両日下見世ニ有之間、御上屋敷留所江可罷出候、且六日入札七日開札ニ有之間、其旨相心得夫々可申達候」とある（一二〇項）。明治二年「御用状留記」の三月二〇日には郡治執役より、桜田屋敷内の大掃除に領内村々から三〇人の詰人足の差出しを命じられている（四一項）。

七月五日には、郡治執役より「明六日朝正六ツ時御供揃御乗切ニ而晴雨共 殿様豪徳寺江御參詣被遊、例之通り御目見被 仰付候間、正六ツ時同寺江相揃可申候」とあり（八八項）、彦根藩主井伊直憲は江戸屋敷の菩提寺である豪徳寺に參詣し、世田谷領内の村々の名主の謁見を許したのである。

これより少し前の六月一七日には、版籍奉還し、井伊直憲は彦根藩知事に任命されていた。

七月八日には、郡治執役から「御帰藩御用」として、領内村々より詰人足一〇名が明九日午前三時までに用度方へ出張するよう命ぜられた（九〇項）。

七月九日には同じく「御荷物附出御用」として、役馬八疋を明一〇日午前五時までに用度方へ提供することを命ぜられた（九一項）。

七月一五日にも、二〇名が「持出し御用」人足としての動員令が下された（九四項）。

七月一六日にも、馬八疋を役馬として「御荷物附出し御用」として提供令が出された（九八項）。

七月二〇日にも同じく役馬八疋（九九項）。

七月二三日は同じく役馬八疋（一〇〇項）、七月二六日には役馬二疋（一〇五項）と相次いで動員され、江戸屋敷を引き払ってゆく様が判明する。

七月二七日には、郡治執役より「是迄 井伊掃部頭領分と認め候処、以来彦根藩支配所と認め可差出候、尤御屋敷江差出候書面ハ是迄通りニ而可然候」とある（一〇六項）。

（3） 戊辰戦争への農民の動員

① 日光出陣への郷夫

慶応四年「御用状留記」の五月七日には、世田谷代官所から彦根藩の日光出陣先へ郷夫二〇人を差出すよう各村への廻達が次のように出されている（一二二項）。

以書付相達候、然ハ日光出陣先々郷夫貳拾人差越候様由来候ニ付、御用筋有之間明八日五ツ時不遅様上町江可罷出

候、

五月一〇日にも代官所から「郷夫一件ニ付申談度義有之間」として一日に各村名主に招集をかけている（一二二項）。

五月二五日には年番三か村より「今日日光表を飛脚到来致候処、郷夫人足旅用金差支候ニ付」「老人ニ付金四兩ツ、御出金之積ニ而、乍御苦勞様明廿六日朝五ツ時大蔵村六右衛門宅江金子御持参ニ而御集会可被下候」との通達が出された（一二五項）。

六月二六日には下野毛村栄次郎より「先達而日光行郷夫追触御免願一条ニ付、尚又明廿七日再願致度趣昨夕大蔵村江罷出候処」とあり（一二六項）、日光行郷夫の「御免願」運動が行われていたことがわかる。

② 奥州表への郷夫

慶応四年八月四日世田谷代官所より役馬二疋（内一疋は上野毛村）の差出しを次のように命じられた（一二三項）。
右ハ奥州表御出張先江附出し御用物、千住宿迄明五日早朝晩七ツ半時（午前五時）迄二さくら田御上屋敷御賦方江差出し可申、（以下省略）

これは、戊辰戦争で彦根藩が奥州表へ出陣しており、そこへ御用物を運送する役馬の提供である。

八月一四日には、年番三ヶ村之内大蔵村名主安藤六右衛門より「奥州行郷夫人足減方歎願につき出張方廻状」が次のように出されている（一二八項）。

以廻文得御意候、然ハ此度世話役米蔵殿病人召連昨日立帰リ候間、就而ハ奥州辺官軍之御支配ニも相成候様子ニ御座候、左候ヘハ郷夫人足此節病人等出来罷在、右代合人足遠方故路用金も多分費ニ相成、陣所ニおゐても人足之義ハ自由ニ相成候義申聞候間、得と御相談之上今一応願書差出し減方歎願仕度候間、明十五日早朝万屋幸右衛門方江

御印形御持参御自身ニ御出張可被下候、其節委細之御相談御座候間、相成丈早朝御集会之程呉々も奉願上候、此状明朝迄行届候様早々御順達、留り村々其節御返し可被下候、以上、

辰八月十四日

年番三ヶ村之内大藏村

名主

安藤六右衛門印

明治元年一〇月五日には年番の和泉村作平他一名から「奥州行郷夫人足手当金不足につき相談の出張方廻状」が次のように出されている（一八八項）。

（前略）郷夫人足手当金差支、今五日郷夫式人奥州木口を罷越実ニ差支之趣、直様金子相送り呉候様年番村江申出候間、兼而御相談申上候通り、壹人ニ付金貳両貳分ツ、明後七日早朝上宿万幸方江御持参被下候（可脱カ後略）

同年十一月、年番三ヶ村より「奥州行郷夫引弘諸勘定割廻状」が次のように出された（二二〇項）。

覚

一金五両三分也 不足

右は奥州行郷夫今般引弘ニ相成候ニ付、諸勘定取調申候処書面之通りニ御座候、来ル廿八日上納之節夫々差引埒合仕度候間、出不足之御村方ハ同日御出金可被下候、此帳面早々御順達留り御返し可被成候、以上、

年番

辰十一月

三ヶ村印

二月一四日世田谷代官所より「奥州表出張郷夫名前・勤日限取調方達書」が次のように出された（二三〇項）。
以書付相達候、然は当辰三月下旬方奥州表御出張之郷夫勤日限取調、来ル十六日迄ニ無相違可申出候、

但、何月何日否何月幾日迄誰と申事代合致候もの之名前不残書出し可申事、

右之通り相達候間日限無相違可申出候、其旨相心得此状早々順達留り村々可返候、以上、

二月二三日には、郡治執役より「奥州表郷夫へ褒美酒・赤飯下賜につき出頭方達書」が出され、上野毛村では源次郎・利八・利三郎・忠右衛門の四名がその対象となり、「右之もの共義奥州表江郷夫二罷越無滞相勤候二付、為御褒美酒・赤飯被下置候間、明廿四日朝四ツ時（午前一〇時）迄二不遅様世田谷上町万屋幸右衛門方江差出し可申候」と記されている（二三四項）。

二月二十九日には「当辰年番」の和泉村・猪方村・岩戸村より「郷夫人足二四人へ下賜酒代・勘定全村々立替渡し方廻状」が次のように出され（二三七項）、「奥州表出張郷夫」一件は決着したのであつた。

以廻文得御意候、然は郷夫人足貳拾四人江金苞両錢四百八拾文御酒代被下置候義、兼而御承知有之割渡延引仕御高免可被下候、就而ハ郷夫勘定金も不足ニ御座候間、御村々ニ而御立替引払ニ相成候迄相勤居候人足江御渡し可被下候、且先般御出金ニ相成候貳拾五匁之儀ハ、年番村ニ而借用致居候間、何卒来春御勘定之節差上候間、左様御承知御貸可被下候、以上、

辰十二月廿九日

当辰年番

いつミ村

猪方村

岩戸村

(4) 瀬田村農民の年貢不納事件

明治二年「御用状留記」の一番最後の記載に瀬田村の年貢不納一件がみられる（一五四項）。

「御用留」の性格と内容（七）（森）

それによると、明治二年一二月九日が年貢の皆落日であつたが、瀬田村の百姓のうち三〇人程が年貢その他の諸入費を納入しなかつた。そこで一二月二三日より同二四日夕方までかつて、用賀・岡本・上野毛の三か村が仲裁に入り、次のとおりの内済になつた。

口書

一 皆納九日村内小前之内之もの共近村諸役入目々多分と相心得百姓代御兩人江相伺候所、鶴藏一件入用金五拾兩割込其外も有之旨右百姓代御申聞二付、乍恐御割合帳拝見仕度再願仕候、然所諸帳面類御役頭御焼失紛乱致二付、此旨相心得候様十二日尚被仰聞候趣承知仕、就而ハ永錢上納仕度申立候所、前同様諸帳面相分兼候段御申聞、一 鶴藏一件入用金五拾兩之論右金承伏為仕候二付、可相成御義二候へハ御割戻し被下度奉存候処、当村 御両山様・隣三ヶ村御役人中御立入被下御利解を受、村内御役頭被致焼失村内一統御氣之毒ニ存、当年御年貢諸役入目等無相違相納可申候

一 是迄三役人方御立会願而御勘定御さ候処、与頭一兩人相加り割合願上候、且諸勘定向後四季ニ被成下置度願上候、前頭組頭・小前一同三御役人方江歎願仕候、以上

明治二巳年十二月廿四日

右之通り承り候事、

用賀村

法徳寺
行善寺

飯田麻次郎

岡本村

芹田次右衛門

上野毛村

田中七左衛門

前条以来相守可申候事、

これによると、①年貢皆済日の一二月九日に村内の小前百姓が、瀬田村の諸役費用が近村に比較して多過ぎるとして、百姓代の二人に、その理由を問いたしたところ、それは鶴蔵一件（内容は不明）の費用五〇両とその他も加算されているからだということだった。

そこで、小前百姓たちは、費用の明細が記されている「御割帳」を見せてほしいと要求したところ、諸帳面類は御役頭の家が火事ですべて焼失してしまったので了解してほしいといわれた。ついては、「永錢上納」を申し入れると、前述の理由で諸帳面が不明で、判明がたいという返事であった。

②鶴蔵一件の入用金五〇両については承知したが、できることなら、その分は返却してもらいたいが、法徳寺・行善寺や隣村三か村の役人が立合仲裁に入って下され、御利解を得、また村内の役頭宅が焼失したのも気の毒なので、当年の年貢・諸役費用は相違なく納めることとします。

③これまでは、三役人が立会って諸勘定をきめてきたが、これからは与組も一人ないし二人参加し負担の割合をきめてほしい。また諸勘定は、今後四季ごとに精算してくれるように願いたい。

以上の三項目について、組頭・小前一同が村方三役人に歎願し、それを連名の二寺と周辺三か村の名主が、その実

現の証人になっているのである。

明治二年の年の暮れに小前百姓が村政のあり方について、小前百姓の立場が反映できるよう改革を求めていたことが判明する。

注

- (1) この二冊の「御用留」は「世田谷区史料叢書」第九卷（東京都世田谷区教育委員会、一九九四年三月発行）に収録した。小稿は、その解説論文を骨子として増補改稿したものである。本叢書の編集を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になった。記して感謝の意を表するものである。
- (2) 「彦根市史」下冊一八頁。
- (3) 「大場家歴代史」四一七頁。
- (4) 「彦根市史」下冊二二頁。

